

保育内容の変遷と幼児期の経験との関連性 －領域「環境」に焦点をあてて－

福永 知久¹⁾・仁科 伍浩^{2) 3)}

要旨

先行研究では、保育内容の変遷を総合的に捉えながら保育内容の在り方を探る必要性を理解し、学びの重要性の根拠を探さなければならないと述べられている。本研究では、学びの重要性を評価する評価指標について示唆を得るために、幼児期の経験との関連性を確認した。結論として、1998年通知の幼稚園教育要領下の幼稚園または1999年通知の保育所保育指針下の保育所へ通所し、幼児期を過ごした現大学生において、幼稚園と保育所で「遊び・経験の記憶内容」に差が無く、また大切であるとする事項について同一であることが示された。また、これらは「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の変遷とも一定の関連が確認できた。

キーワード：保育内容、領域「環境」、幼稚園教育要領、保育所保育指針、
幼児教育

I. はじめに

近年の幼児教育・保育領域では、2017（平成29）年に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令が同時に改訂（改定）された結果、3歳以上児の幼児教育・保育における「ねらい及び内容」が統一され、一層の整合性がもたらされた。加えて、各法令が対象とする施設で「環境を通した教育」「乳児期からの発達と学びの連続性」「小学校教

1) 鹿児島純心女子大学 看護栄養学部 看護学科

2) 日本工学院八王子専門学校 スポーツ・医療カレッジ こども学科

3) 豊岡短期大学 通信教育部 こども学科

育との接続のあり方」などが明確にされた点は幼児教育・保育の歴史から見ても大きな変革であった。

こうした定期的な法改正は社会要請や政府の指針に準じて行われるが、近現代では国際情勢も加味される。つまり、子どもの健やかな成長を促す幼児教育・保育は、法改正などによる影響を受け、ある一定の方向性を持って実践されると言える。本改正も例外ではなく、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格の基礎を培う重要なものである」と明記され、幼児教育・保育が名実ともに日本の教育の中に位置づけられた 2006 年（平成 18 年）の教育基本法改正や、幼稚園教育要領と保育所保育指針の法的な位置づけが対等になった 2008 年（平成 20 年）の改訂（改定）の影響を受けている。また、同時に改訂された小学校以上の学習指導要領からわかるように、近年の改訂（改定）は従来の社会情勢に応じた 20 世紀の改訂（改定）とは異なり、未来の変化を見据えて子どもたちの力を育てる「社会に開かれた教育課程」を目指すなど、着眼点が現在の社会情勢から予測される未来の社会情勢へと遷移した。

これらの法改正は幼児教育・保育の学びにも影響を及ぼすが、学びへの影響が社会に還元されるまでに 20 年弱の時間を要するため、実際の影響を適切に評価することは極めて難しい。その証拠に、保育内容の変遷に関する調査や教授内容の実践報告などは散見されるが^{1,3)}、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に準じた幼児教育・保育を受けてきた影響や成果について触れている研究は皆無に等しい。

ここで近年以前の幼児教育・保育に関わる現在の要領や指針と、そこに掲げられている保育内容の変遷を概観すると、我が国で最初に創設された幼稚園は、1876（明治 9）年に開設された東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）の附属幼稚園で、保育内容はフレーベルの「恩物」と博物理解・計数・唱歌・説話・体操・遊戯などであった。1899（明治 32）年に文部省が初の法的基準である「幼稚園保育及設備規定」を公布し、保育 4 項目（遊嬉・唱歌・談話・手技）が保育内容として規定された。1926（大正 15）年には「幼稚園令」が公布され、「幼稚園令施行規則」での保育内容に自然観察や動物飼育、植物栽培といった観察

が追加され、5項目（遊戯・唱歌・談話・手技等・観察）となった。やがて日本は戦時下に入り、保育内容に「体育・生活・規律」といった訓練が含まれるようになった。戦争終結後の1946（昭和21）年には「日本国憲法」が制定され、その理念に基づき教育や福祉も整備され、1947（昭和22）年には「教育基本法」及び「学校教育法」の制定によって新しい教育理念が明らかに示されるとともに、幼稚園が学校教育の一種として位置づいた。新制度発足に伴い、文部省によって「保育要領－幼児教育の手引き－」が編成され、これは幼稚園・保育所・家庭等に対する保育の手引書として扱われた。本手引書に記載された保育内容は、12項目（見学・リズム・休息・自由遊び・音楽・お話・絵画・製作・自然観察・ごっこ遊びと劇遊びと人形芝居・健康保育・年中行事）に分類されていた。その後、幼稚園と保育所、家庭は細分化され、幼稚園の保育内容は1956（昭和31）年に制定された「幼稚園教育要領」によって6領域（健康・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画製作）に再編している。保育所は、1965（昭和40）年に厚生省が制定した「保育所保育指針」を基軸とし、乳幼児を7つに区分し、各区分に対して保育内容を示している。1歳3ヶ月から2歳までは2領域（生活・遊び）、2歳児は3領域（健康・社会・遊び）、3歳児は4領域（健康・社会・言語・遊び）、4歳以上は「幼稚園教育要領」に準じて6領域（健康・社会・自然・言語・音楽・造形）が設定された。その後、1989年（平成元年）に「幼稚園教育要領」、その翌年には「保育所保育指針」がそれぞれ25年ぶりの大きな改訂（改定）が行われ、「ねらい及び内容」は現在にも続く5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）に変更された。それ以降は冒頭の改訂（改定）を含め、10年おきに変更されている。

以上のように、我が国の保育内容は、時代や社会の要請を受けながら明治以降を中心に変化をし続けてきた。これらの変化は、その時々や政治的背景や社会要請によってもたらされたが、いずれの改訂（改定）についても学びへの影響が評価されていない。後藤¹⁾が、保育内容の変遷を総合的に捉えながら保育内容の在り方を探る必要性を理解し、学びの重要性の根拠を探さなければならないと述べているが、学びの重要性の根拠を示すには評価指標が必要である。

ただし、保育内容の評価は定期的にされておらず、時代によって尺度も変わると考えられ、保育内容は学力などと比較して数値化しにくく定量的な評価が難しいのは紛れもない事実である。

そこで、本研究では学びの重要性を評価する評価指標について示唆を得るために、保育者（幼稚園教諭・保育士）養成課程において保育の各科目を履修した者による幼児教育・保育によってもたらされた被保育者の主観的経験と、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の「ねらい」との関連性を確認した。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究協力者

本研究の協力者は、保育者養成課程以外に所属している大学生（2021 年 10 月現在 18 歳～22 歳）152 名である。「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」に関する知識が回答に影響を与える可能性を排除するため、質問項目である保育内容に関わる教育を受けていない保育者養成課程以外の大学生を対象とした。

2. 調査期間及び調査依頼方法

アンケート調査は 2021 年 10 月に実施した。アンケート調査の際は、本調査における説明及び質問内容が記載された用紙を直接配布し、口頭でも説明した。また、回答及び提出には Google Forms を使用した。

3. 調査内容と評価項目

記憶に関する調査で、人ではおおむね 3 歳以前の幼児期の記憶を喪失するという結果が示されているため⁴⁵⁾、研究協力者の幼児期（3 歳以上～小学校入学前の 6 歳まで）の遊びや経験の具体例・思い・考えなどを対象に調査した。また、調査項目は下記 1～3) のとおり、それぞれ評価項目を設定した。なお、遊びや経験に対する設問となる 2～3) の①～⑫の項目は、幼稚園教育要領第 2 章「ねらい及び内容」⁶⁾・保育所保育指針第 2 章「保育の内容（3 歳以上児）」⁷⁾の「環

境」に関する領域に記載されている、周囲の様々な環境に好奇心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う観点から流用した。通常であれば5領域すべての項目について調査するべきだが、子ども自身に気づいたり考えたりする能動的な活動を支援する点から、主観的経験値の影響度が最も高いと考えられる「環境」を選択した。

1) 幼児期（3歳以上～小学校入学前の6歳まで）の頃に通っていた施設があれば、「幼稚園」、「保育所」、「その他」から選択肢にて回答してください。「その他」を選択した場合は可能な範囲で自由に記載してください。

2) 幼稚園・保育園内外の生活のうち、下記①～⑫項目それぞれに関する遊びや経験をした思い出がありますか？ それぞれ「はい」、「いいえ」のいずれかを選択してください。

①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。

④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。

⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。

⑥日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

⑦身近な物を大切にする。

⑧身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。

⑨日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

⑩日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

⑪生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。

⑫行事において国旗に親しむ。

3) 上記2)の①～⑫のうち、保育環境として大切であると考える項目を3つ選択してください。

4. 統計解析

質問票より得られたデータに対し記述統計を行い、各設問への回答数とその回答割合を算出した。回答割合は有効回答数に対する割合（％）を算出するものとする。幼児期に通っていた施設による群間比較（幼稚園 vs. 保育所）には、Fisher's exact test を用いた。また、幼稚園と保育所の群間差の指標として、回答割合の差とその 95% 信頼区間（95%CI）を算出した。以上の幼稚園と保育所の比較には、アンケートの回答において幼稚園または保育所の回答が得られたアンケートのみを採用し、その他の施設のみへの通所者や、幼稚園と保育所の両方に通所していた回答は除外した。全ての検定において、有意水準は両側 5% であり、統計解析は SPSS ver23.0 (IBM Japan, Ltd., Tokyo, Japan) により行った。

5. 倫理的配慮

本研究は、ヘルシンキ宣言を尊重し、研究協力者の人権及び利益の保護に配慮した研究計画を立てて実施した。研究協力者に対して、研究の目的・方法・発表・研究参加についての自由の保障と内容の守秘、個人の特定を避けることに関する配慮、辞退してもその後受ける教育や成績に影響がないことについて記した書面を配布し、口頭で説明した。質問票は、個人が特定できないように無記名設定とし、本研究への参加同意判定は回答の提出によって行った。回収したデータは鍵のかかる場所に施錠して保管し、情報の漏えいがないように注意した。

Ⅲ. 結果

1. アンケート回答者の背景

本研究におけるアンケートの提出は 135 名 (88.8%) であった。幼児期に通っていた施設に対する回答は、幼稚園が 74 名 (54.8%)、保育所が 49 名 (36.3%)、その他(通所施設なし)が 1 名 (0.7%)、幼稚園と保育所の両方通所が 11 名 (8.1%) であった。

2. 幼稚園・保育所内外の生活の中で、遊びや経験をした思い出のある項目

幼稚園出身者 74 名と保育所出身者 49 名の「幼稚園・保育所内外の生活」のうち、遊びや経験をした思い出が残っている項目に対する回答割合の比較結果を Table 1 に示す。

幼稚園出身者と保育所出身者の 2 群間に、統計学的有意差は検出されなかった。割合差が大きい傾向が確認された項目は、保育所出身者の「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」で、回答割合が多い傾向にあった（幼稚園出身者：82.4%、保育所出身者：93.9%、割合差：11.45 [95%CI: -0.70, 23.59]%)。

3. 保育環境として大切であると考える項目について

幼稚園出身者 74 名と、保育所出身者 49 名の、幼稚園・保育所内外の生活のうち、大切であると考える項目に対する回答割合の比較結果を Table 2 に示す。

幼稚園出身者と保育所出身者の 2 群間に、統計学的有意差は検出されなかった。割合差が大きい傾向にあった項目は、保育所出身者の「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」で、回答割合が少ない傾向にあった（幼稚園出身者：52.2%、保育所出身者：51.0%、割合差：-11.14 [95%CI: -30.89, 8.60]%)。

Table 1. 幼稚園・保育所内外の生活の中で、遊びや経験をした思い出のある項目

	幼稚園出身者 (n = 74)		保育所出身者 (n=49)		Difference (保育所 - 幼稚園)		
	n	%	n	%	P-value	割合差(%)	95%CI
① 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	61	82.4	46	93.9	0.099	11.45	-0.70 , 23.59
② 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	61	82.4	40	81.6	>0.999	-0.80	-16.17 , 14.57
③ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	67	90.5	41	83.7	0.273	-6.87	-20.50 , 6.76
④ 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	66	89.2	41	83.7	0.419	-5.52	-19.40 , 8.36
⑤ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	60	81.1	42	85.7	0.627	4.63	-10.04 , 19.31
⑥ 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	55	74.3	35	71.4	0.836	-2.90	-20.72 , 14.93
⑦ 身近な物を大切にする。	69	93.2	45	91.8	>0.999	-1.41	-12.00 , 9.18
⑧ 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	62	83.8	40	81.6	0.809	-2.15	-17.34 , 13.03
⑨ 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	42	56.8	27	55.1	>0.999	-1.65	-21.50 , 18.19
⑩ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	60	81.1	36	73.5	0.376	-7.61	-24.49 , 9.27
⑪ 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	31	41.9	24	49.0	0.464	7.09	-12.79 , 26.96
⑫ 行事において国旗に親しむ。	28	37.8	20	40.8	0.851	2.98	-16.56 , 22.52

割合差：保育所出身者における回答割合 - 幼稚園出身者における回答割合，95%CI：割合差の95% 信頼区間。P-value: Fisher's exact test (幼稚園出身者 vs. 保育所出身者)。

Table 2. 大切であると考える項目について（3 項目選択式の複数回答設問）

	幼稚園出身者 (n = 74)		保育所出身者 (n=49)		Difference (保育所・幼稚園)		
	n	%	n	%	P-value	割合差(%)	95%CI
① 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	43	58.1	30	61.2	0.852	3.12	-16.46 , 22.69
② 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	20	27.0	9	18.4	0.288	-8.66	-25.08 , 7.76
③ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	15	20.3	10	20.4	>0.999	0.14	-15.95 , 16.23
④ 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	12	16.2	11	22.4	0.480	6.23	-9.70 , 22.16
⑤ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	46	62.2	25	51.0	0.265	-11.14	-30.89 , 8.60
⑥ 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	13	17.6	8	16.3	>0.999	-1.24	-16.19 , 13.71
⑦ 身近な物を大切にする。	47	63.5	31	63.3	>0.999	-0.25	-19.51 , 19.01
⑧ 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	13	17.6	7	14.3	0.804	-3.28	-17.77 , 11.20
⑨ 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	3	4.1	4	8.2	0.435	4.11	-5.73 , 13.95
⑩ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	2	2.7	6	12.2	0.058	9.54	-1.41 , 20.50
⑪ 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	5	6.8	3	6.1	>0.999	-0.63	-10.40 , 9.13
⑫ 行事において国旗に親しむ。	0	0.0	2	4.1	0.157	4.08	-2.05 , 10.22

割合差：保育所出身者における回答割合 - 幼稚園出身者における回答割合，95%CI: 割合差の95% 信頼区間。P-value: Fisher's exact test (幼稚園出身者 vs. 保育所出身者)。

IV. 考察

1998（平成 10）年通知の幼稚園教育要領下⁸⁾、及び 1999（平成 11）年通知の保育所保育指針下⁹⁾にて幼稚園または保育所に通所していた経験をもつ大学生を対象に、「幼児期の遊びや経験の思い出」や「大切だと考える事項」に関する調査を行ったところ、幼稚園出身者と保育所出身者で経験や思い出の内容及び大切だと考える事項について回答頻度に有意差がないことが示された。遊びや経験の思い出の有無に対して、幼稚園、保育所出身者ともに、多くの項目で 70% 以上の学生が「思い出がある」と回答しており、特に幼稚園出身者では「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」及び「身近な物を大切にすること」を記憶していた被験者が 90% を超え、保育所出身者では「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」、「身近な物を大切にすること」が 90% を超えていた。

一方、「日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ」及び「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ」、「行事において国旗に親しむ」の 3 項目は「思い出がある」とする回答率が 60% を下回っていた。さらに、「大切である」と考える事項について、幼稚園、保育所出身者ともに、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」及び「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付く、いたわったり、大切にしたりする」、「身近な物を大切にすること」の選択率が 50% を超えていた。

上記の結果を本調査回答者（大学生：18～22 歳）が幼児期（3～6 歳）を過ごした 2001～2009 年頃の時代背景と共に検討する。1990 年代後半から 2000 年初頭は、かねてより議論が進められていた「幼保一元化」に対し、実際に幼保近接化が目に見える形となってきた時代である。具体的には、幼稚園側の給食提供や保育時間の延長など機能面の充実が積極的になりつつあり、90 年代後半には政府の連携強化策により「幼保一体型施設」の創設が推進されている¹⁰⁾。保育所側も、1965 年に策定された「保育所保育指針」について 1990 年と 1999 年に改定が行われ、法改正や条約批准にかかわる変更点が見受けられた。具体的には、1990（平成 2）年の児童福祉法の改正で保育士の業務規定

が設けられ、保育士の業務に「保護者を支援・指導すること」が加えられた。1994年には、我が国の「児童の権利に関する条約」への批准に伴い、子どもの人権の尊重が強調されている。1998年には児童福祉法が改正され、「保母、保父」の表記が「保育士」に統一された。また、保育に関する社会の動きが影響した変更点が多く見受けられ、アレルギーへの対応、乳幼児突然死症候群の予防、児童虐待への対応等の記述が加えられている。これは保育士が子どもを預かるだけではなく、独自の専門性が求められる時代になったことを示している¹¹⁾。以上より、幼稚園及び保育所において、機能面、専門性、支援等について近接化が顕著となった時代と考えられる。

さらに、本論の調査項目に関連すると考えられる1999年通知の保育所保育指針の背景では、情報化の進展により子どもの直接体験が著しく不足している点が問題視され、自然との触れ合いの重要性が提唱されていた¹¹⁾。また、文部省の「時代の変化に対応した新しい幼稚園教育の在り方について」という報告書でも、「自然体験、社会体験などの直接的、具体的生活体験を重視すること」と提案されている¹²⁾。上記の要請を受け、1998（平成10）年改訂の幼稚園教育要領でも、領域「環境」の「内容の取り扱い」において「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」と明記された。また、5歳児の保育内容においては、「身近にいる大人が仕事をしている姿を見て、自らも進んで手伝いなどをしようとする」が追加されている。

以上の時代背景と調査結果を照らし合わせると、1990年代からの幼保一体化の流れを受けており、幼稚園と保育所で「遊び・経験の記憶内容」には差が無く、また大切であると考える事項についても同様の分布を示した結果は妥当であると考えられる。「幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること」を軸とした1999年の追加事項の影響を受けているためか、保育所側で「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く」

の回答頻度が高い(93.9%)ことは、1999年の保育所保育指針における重点事項と一致している。

また、「日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ」「生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ」は、保育現場では保育士が能動的に干渉しなければ達成されない内容であり、施設によっては経験できなかった可能性がある。その一方で、2008年の尾崎¹³⁾の報告において形感覚に分類された体験(描画や折り紙等)が数感覚、量感覚も促す体験となっていることが示されていることから、主観的な記憶として残っていないだけで数量・図形などへの感覚が発達した可能性は否定できない。いずれの場合においても、これら数感覚などの要因に対しては、2017(平成29)年改訂の幼稚園教育要領や2017(平成29)年改定の保育所保育指針に引き続き含まれている。なお、1999年において組み込まれていなかった「行事において国旗に親しむ」の回答頻度が低かった結果は妥当であると考えられる。

本研究では、当時の環境領域における「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の内容との合致を確認できた。また、幼児教育・保育の差がなくなりつつある時代であったため、幼稚園出身者と保育所出身者に差がない点については一定の妥当性があるが、サンプルサイズの不足や当時通っていた施設の幼児教育・保育の内容によっても左右されるため、現段階では議論ができない。しかし、「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の内容と当時含まれていなかった「行事において国旗に親しむ」には明確な差が存在しており、要領や指針の影響力が確認できた。

V. 結論

1998(平成10)年通知の幼稚園教育要領下の幼稚園または1999(平成11)年通知の保育所保育指針下の保育所へ通所し、幼児期を過ごした現大学生において、幼稚園と保育所で「遊び・経験の記憶内容」に差が無く、また大切であると考える事項について同一であることが示された。また、これらは「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の変化とも一定の関連が確認できる。

今後は「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の変更と、変更からの時間経過による現場への定着、適切な研究協力者の選定、各調査項目に対する研究協力者の具体的なエピソード、基礎学力への影響等の項目を精査し、各年代別に横断調査を実施して「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」の変更がもたらす影響の推移を観察する必要がある。将来的には幼児教育・保育の現場においてもたらされる変化を評価する目的で、各年代における入園時点と卒園時点の成長度の比較検討も望まれる。

謝辞

本研究を行うにあたりご協力くださいました対象者と関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 後藤紀子：保育内容に関する研究「環境」領域に於ける学習内容の変遷と実態. 心理社会的支援研究 9 : 39-53, 2018
- 2) 伊藤孝子：領域「環境」の変遷に関する一考察. 滋賀文教短期大学 23 : 11-24, 2021
- 3) 小山容子：幼稚園教育要領 領域「環境」における保育内容の変遷. 教育学論集 73 : 111-125, 2021
- 4) 及川弘崇：実は覚えている物心のつく前. ファルマシア 53(3) : 264-264, 2017
- 5) Akers K. G. et al : Hippocampal Neurogenesis Regulates Forgetting During Adulthood and Infancy. Science.344 : 598-602, 2014
- 6) 文部科学省：幼稚園教育要領＜平成 29 年告示＞. フレーベル館, 東京, 2017
- 7) 厚生労働省：保育所保育指針＜平成 29 年告示＞. フレーベル館, 東京, 2017
- 8) 文部省：幼稚園教育要領解説 平成 10 年 12 月. 大蔵省印刷局, 東京,

1998

- 9) 厚生省：保育所保育指針 平成 11 年改定. フレーベル館, 東京, 1999
- 10) 瓜生淑子：幼稚園と保育園の“近接化”をどうみるか. 教育実践総合センター研究紀要 11：155-160, 2002
- 11) 天野佐知子：保育所保育指針の変遷に関する一考察－領域「環境」の保育内容に着目して－金沢星稜大学人間科学研究 13(1)：1-6, 2019
- 12) 森上史郎：新しい教育要領・保育指針のすべて—どう読みとき、どう実践に生かすか. フレーベル館, 東京, 2000
- 13) 尾崎さやか：幼児の数・量・形感覚に関する研究－日常「体験」に基づくカリキュラム構成の指針－. 鳥取大学数学教育研究 10：2008

論文要旨

Focusing on the local environment to determine the relationship between changes in childcare content and early childhood experiences

Tomohisa Fukunaga, Kumihiko Nishina

Abstract

A previous study indicates the significance of investigating in the most appropriate types of childcare content, holistically apprehending changes in that content, and seeking evidence confirming the importance of learning. This study demonstrated the relationship between early childhood experiences and changes in childcare content to glean insights regarding evaluation indicators that can measure the importance of learning. The results revealed no significant differences in the memories of play activities or experiences in kindergartens or nurseries between the two studied cohorts of current undergraduates, i.e., those who attended kindergarten under the 1998 kindergarten educational guidelines, and those who attended nursery school under the 1999 nursery childcare guidelines. It was also found that both cohorts agreed about the significance of their early childhood experiences in either type of institution. In addition, the study confirmed that the importance placed on memories was associated with changes effected in both the kindergarten educational guidelines and the nursery childcare guidelines.

Keywords

childcare content, local environment, kindergarten educational guidelines, nursery childcare guidelines, early childhood education